



飛 行 第 五 聯 隊
除 隊 記 念

序

塵煙暗き武藏野原頭に朔風吹き荒ぶ大正十三年一月十日は吾が名譽ある入營の日なりき、由來二星霜今や重任終りて將に飛行第五聯隊を去らんとす豈袂別の情に堪へんや。

顧れば過去は多端なりき、大隊野外演習特別大演習は言はずともがな。吾等が向ふ處天に地に一として失過なく赫々たる成果は吾等が奮闘の表現なりき。仰いで見よ、流れも清き多摩川の邊に巍然とし聳ゆる東洋一の吾等が兵舎を。伏して眺めよ、帝都の西七里に位する大飛行場を皆是吾等が過去二星霜の奮闘の跡にして彼を思ひ此を想ふの時萬感交々至る誰か思慕の情に堪へべけんや。干城の任務愈々重き秋、吾等が築きし武藏野の礎には嚴然として侵すべからざる美風を遣したり。

吾等は袂別の悲哀の中に此の満足を味ひ得るを喜ぶなり、さらば我が飛行第五聯隊よ！懐しき戦友諸君よ！諸君が希望多き前途に邁進し流汗淋漓として活動する餘暇、靜かに兵營生活を追憶するの時、このアルバムを繙かば當時の面影髣髴として諸君が眼眸を惹かん希くば是を以て座右に備へ永遠に吾等が兵營生活の思出たらしめん事を。

大正十四年十一月三十日

記念寫眞帳調製委員







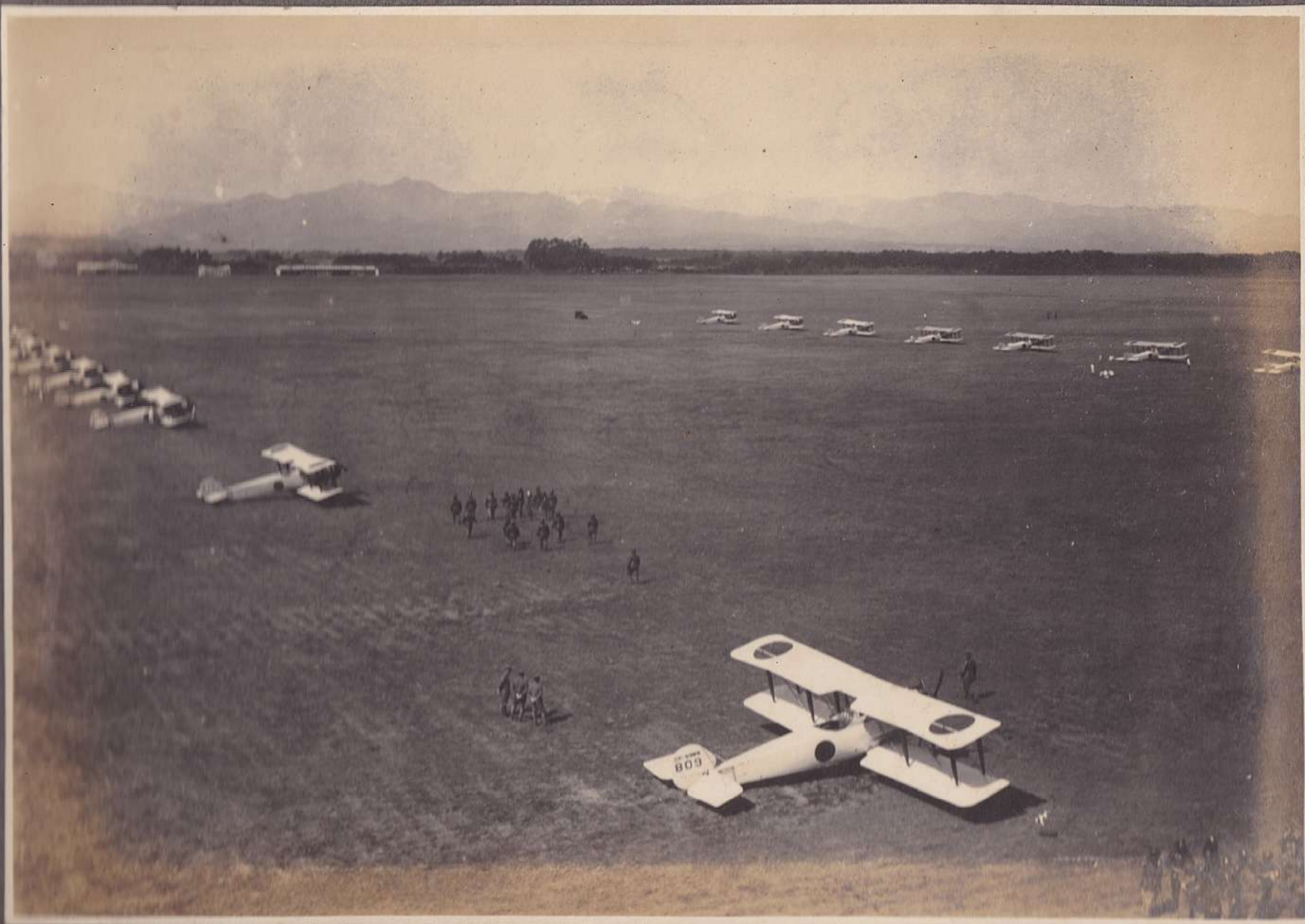




飛行第五聯隊 (斜寫真)









乙式一型偵察機

358

自重 970 斤
搭載量 430 斤